

マクスーダ先生、多文化共生の生きた教科書

杓 谷 茂 樹

塩谷マクスーダ先生は、インドはカシミール地方で生まれ、モンゴルでの留学を経た後、来日した。日本に住んで40年ほどになるが、その間、社会人向けの英語教育や大学での異文化コミュニケーションの授業を担当してきた。平成30年の開学とともに、本学の専任教員として赴任したマクスーダ先生は、国際文化交流学科で英語科目のほか、「国際交流論」「異文化コミュニケーション論」「多文化共生社会論」「多文化共生社会演習」「テーマ別基礎ゼミ」などを担当してきた。

彼女は授業の中で、自身の経験に基づいた多文化共生のあり様を学生に示してきたが、学生とともに本場インドのカレーを作り、女子学生に民族衣装のサリーを着てみさせるなど、他の教員にはマネできない彼女ならではの実践的な授業もおこなって、学生にいい影響を与えてきた。体験することは強い。学生たちもマクスーダ先生のもとで異文化を経験的に理解し、多文化共生について深く考えることができたことだろう。マクスーダ先生は、まさに多文化共生の生きた教科書なのだ。

マクスーダ先生は、人と接するときには、相手が誰であれ、いつも自分のスタイルを崩さない。自分の主張を明確に表に出して、相手と対峙する彼女のスタイルは、それがもし日本人同士の付き合いの中だったら、まず見られないものであり、むしろ避けられてしまうものかもしれない。でも、先生のふるさとの多民族国家インドでは、そんな付き合い方があたりまえなのだろう。長く日本で暮らしてきた中でも、マクスーダ先生はインド人としてのアイデンティティーを強く持ち続けてきたことがよくわかる。その上で、そんなインドと日本の文化の壁をいとも簡単に乗り越えてしまうような、パーソナリティーをマクスーダ先生は持っている。その誇りに満ちた、たたずまいゆえに、世界的に見ればやや特殊といえるかもしれない日本人の社会においても、多くの人にリスペクトされているのだ。だから、カラフルな服装に身を包み彼女が現れると、その場の雰囲気がパッと明るくなる。石川県のみならず全国で、各界に友人がたくさんいるのもうなずける。

こうして、長く北陸地方を中心に多文化共生を進めることに力を尽くしてきたマクスーダ先生であるが、彼女の研究者としての本籍地は、現代モンゴルの社会と文化である。令和2年には、本学中央キャンパスで日本モンゴル学会の定期大会が開催されたが、その際に彼女は大会の実行委員長を務めている。日本のモンゴル研究者の中でも、彼女は重要な存在なのだ。実は、私は日本のモンゴル研究者の中堅どころに親しい友人が何人もいるのであるが、みんなマクスーダ先生

杓 谷 茂 樹

と共通の友人だったことは、後になってわかったことだった。世間は狭いものだと思いつつ、ちよっとうれしい。

これで先生は国際文化交流学部のスタッフからは外れるが、これからも facebook の友だち同士として、お互いの活動に「いいね」のボタンを押していければと思う。マクスーダ先生、お疲れさまでした。これからもよろしくお願いします。